

「ベンチャービジネス」に期待する

農林水産省農林水産技術会議事務局長 岸 国平

このごろ、農薬や農業機械メーカーの幹部の方々と会ってみて、その顔色が何となくすぐれないように見えるのが気にかかる。自分が年をとって、昔のように元気のいい若手と会う機会が少なくなったせいかもしれないと思うが、そうであってくれればむしろ幸いである。

農薬と言ひ、農業機械と言ひ、ユーザーは農業者である。農業に活気がないときは、直接その影響を受けることは想像にかたくない。昨年は、水田利用再編で64万ヘクタール前後の水田が転換され、また8月末の台風と9月の意外な低温で、東北方面は2年つづきの不作であった。これらが、有形無形に、顔色に影響していることは否めない。しかし、わが国農業は今年も、また来年以降も、550万ヘクタールの農地を、120%にも130%にも活用し、生産を上げていかなければならない。農業を取り巻く環境は、益々厳しくなるが、厳しければ厳しいだけ、なおさら労働生産性、土地生産性ともに上げ、収益性の高い農業を築き上げていかなければならない。それには、農薬も農業機械も、有力な武器である。今やそれなくして、高能率の農業の姿を考えることすらできない。それ故に、農薬にも農業機械にも、しっかり踏んばって頂きたいと切に願うのである。

最近アメリカでは、遺伝子組換え技術など先端的技術開発分野で、ベンチャービジネスなるものが大活躍とのことである。ひるがえって、

わが国の農薬や農業機械メーカーのかつての姿をふり返ってみると、何十年前、やはり多分にベンチャービジネス的生い立ちの企業があったのではないだろうか。生い立ちの姿形は違っても、少なくとも意気込みだけはみなベンチャービジネス的な凄い意気込みだったように思う。

筆者がかつて旧園芸試験場にいた頃、大小いろいろな企業から、まだ開発段階の、少量のサンプルしかない薬剤について、多くの相談を受けたものであった。もちろん、大きな規模の試験をしなければならない委託試験もあったが、概して少量時代のものが興味深かった。少量のサンプルを大切に抱えて、将来への夢を語った数多くの若者たち、いまはもうその企業が大企業になり、その人達は課長、部長になっておられるが、その若者たちの冴えた顔色を忘れることができない。そしてその頃の小ビンの中味から、今もなお大活躍中の薬剤が幾つも出ているのである。

最近では、農薬も効果だけでなく、急性・慢性の毒性試験に金と時間がかかり、容易なことでは日の目を見ない仕組みになっている。それだけに、開発が大変であることはよく分り、そういう困難を乗り越えて開発に当たっておられる企業の方々に對し、心から敬意を表するものであるが、是非一層の顔色の冴えを見せて、すぐれたものをどしどし世に出してもらいたいものである。

昨年末に、農事試験場の大部分が筑波への移転を完了したが、その時、農機具展示館の陳列品の移転も行なわれた。その陳列品の中には、田植機の開発初期の試作品が何種類も含まれていた。それらの品は、常に、見る者に対して、田植機開発当時の研究者達の熱気を強く感じさせてくれるものであった。

現在普及率90%をこす田植機も、開発当初は、機械的にはもちろん、それを支える苗の育て方も試行錯誤の連続であった。その当時、機械の専門家が試作工場で部品を改良する一方で、稲栽培の専門家は、それにかかる苗の作り方を工夫した。しかも途中からは、試験場だけでなく、文字通りベンチャービジネス的機械メーカーが

参画し、売れる機械として完成していったのだという。

それらの努力が実って、現在では田植機は全国津々浦々に普及するほどになり、機械田植の普及率は90%をこえる状態になった。いまその普及率の高さが、業界の圧迫要因になっている面もあるが、今後のわが国農業の行方を考えるとき、水田転換の面積はさらに増加させなければならぬのであり、そこでは現在の水稲用機械以外の有効な農機具の出現が待たれている。水稲用とちがい、需要が少量で、要求が多様というむずかしさはあるが、そのむずかしさを克服しての、かつてのようなベンチャービジネス的取り組みを期待してやまない。

年 頭 の 掬 掬

農薬工業会会長 宗 展 生

新年おめでとうございます。

本年は“戌”年とのことで、狛犬の故事（魔除け）にあやかり、今年こそ2年続きの冷災害による農作物の被害を回避できるよう、祈りたい気持ちでございます。殊に冷害に追い打ちをかけるような15号台風により、甚大な被害を受けられた北日本の農家の皆様や、生産の技術指導に当たられた方々に、衷心よりお見舞いを申し上げます。

昨年は私共農薬工業会の業界全体にとりましても、生産・出荷とも非常に厳しい状況でございましたが、除草剤および生育調節剤は幸いにも、比較的安定した需給状況を示しましたことは、ご同慶の至りでございます。これは偏に、

植調協会の皆様と、それを支える各地域の試験研究関係の諸先生が、永年にわたり築き上げられた、農薬の必要性和安全使用技術の普及の賜物と深く感謝の意を表します。

また昨年は、植物調節剤利用開発普及事業30周年のお祝が催され、さらに植調協会専務理事吉沢長人殿が、第1回の科学技術振興功績者の栄誉に輝くなど、大変明るいでき事がございまして、除草剤・生育調節剤の開発普及につき、植調協会と繁栄を共にする私共農薬工業会にとっても、極めて喜ばしいことでございました。

さて、新しい年も相変らず農業をとりまく環境情勢は厳しく、減反政策の継続、農業の低生産性や老令化が進行する現状を脱却するために